

主節主語後への長距離スクランブリングとフォーカス認可*

赤 楚 治 之

This paper attempts to solve the problem of distinct grammaticality of long-distance scrambling (LDS) to post-subject position between out of finite clauses and out of non-finite clauses, in terms of focus licensing, without recourse to the A/A' dichotomy. Following Rizzi's (1997) cartographic approach, I assume that there is a focus head in the CP-zone of the embedded clause, regardless of its finiteness (i.e., either finite clauses or infinite clauses). Under the assumption that scrambling is focus-driven, along with Miyagawa (1997), I propose that the scrambled phrase containing [+focus] should be checked off at the nearest checking site. This focus-feature checking mechanism cannot allow the LDS to post-subject position between out of finite clauses because the CP-zone of the embedded clause is the position to license the focus feature. I claim that this mechanism does not work when the subject of an embedded clause is phonologically unrealized, because of Hoji's (1985) Ban on String-Vacuous Scrambling.

Key words: *Japanese, scrambling, focus, cartography, A/A'*

1. はじめに

Scramblingの研究は、談話的要因が働いているという直感から、絶えず、その方向からの記述・分析が正しいと考えられてきた。そのような中でScramblingという移動現象そのものの統語論的特性をまずは見極めることが重要であるという認識を示したのがSaito (1985)であった。当時、生成文法の歴史の中で初めてUGに迫ることのできる理論である「原理と原則のパラメータ」(当時はGB理論(統率・束縛理論)と呼ばれていた)の枠組みを用いて、日本語の分析を試みた研究である。それは、上に書いたような談話的要素を除外して純粹に統語論的な操作(= Move α)として捉えようとした労作である。Saito (1985, 1989)のアプローチは、Chomskyが生成文法の開発の中で採ってきた態度と同一のものである。簡単に言えば、言語のような研究対象が広範囲にわたるものを研究する際には、まずアプローチ可能な方面から研究を徹底的に推し進め、その研究途上で遭遇する、まだよく我々の知識では手に負えないものについては一時的に棚上げしておくという態度である。それによって得られた研究成果が有効であるのかないのかについての最終判断は、棚上げしたものに対する研究が十分に進むまではつかないものの、この研究態度こそが反証可能な研究として生成文法を推進してきたと言える。

具体的なレベルで言うならば、文法に入り込んでくるTopicやFocusなどといった談話的要

因については重要であるという認識を持ちながらもそれを暫定的に棚上げしてきたことは、Chomsky (1995: 220) が次のように記している。

Notice that I am sweeping under the rug questions of considerable significance, notably, questions about what in the earlier Extended Standard Theory (EST) framework were called “surface effects” on interpretation. These are manifold, involving topic-focus and theme-rheme structures, figure-ground properties, effects of adjacency and linearity, and many others. Prima facie, they seem to involve some additional level or levels internal to the phonological component, postmorphology but prephonetic, accessed at the interface along with PF (Phonetic Form) and LF (Logical Form).

90年代のMinimalist プログラムに入り、Legibility condition (「読み取り条件」) が統語論のモデル化に重要な役割を果たすという認識が広まったのを受け、ヨーロッパのほうで Rizzi (1997) と Cinque (1999) などが、それまで単一の機能範疇であると仮定されてきた補文標識 (complementizer) を詳細に記述・分析してゆくという Cartography (地図作成) アプローチが確立されていくようになった。そこでは、これまで意識的に統語論分析から一時的放置されてきた Topic/Focus などのいわゆる談話的要素を積極的に取り入れ、それが純粋な統語論的操作あるいは統語構造とどのような関係にあるのかについての研究が主として印欧語の言語を対象にして行われてきた。

本稿の目的は、Cartography の成果と、Saito (1985, 1989) をはじめとする純粋な統語論的観点からの Scrambling 研究を結びつけることにより、これまで A/A バーを用いて説明されてきた現象に関して新たな説明の可能性を探るという点にある。

2. 長距離スクランブリング

日本語におけるスクランブリングは、これまでの研究から次の3つに区分されてきた¹⁾。

S: VP内 scrambling (Short-distance scrambling)

- (1) a. 太郎が [vp 花子に 手紙を 送っ] た
- b. 太郎が [vp 手紙を 花子に 送っ] た

M: 同節主語を超える scrambling (Middle-distance scrambling)

- (2) a. 太郎が 花子を 誉めた
- b. 花子を 太郎が 誉めた

L: 埋め込み文から外に出る scrambling (Long-distance scrambling)

- (3) a. Benが [太郎が 花子を 誉めたと] 聞いた
- b. 花子を Benが [太郎が 誉めたと] 聞いた

(1) では、VP内の項である間接目的語 (GOAL) と直接目的語 (THEME) が入れ替わっている scrambling で、どちらを基底構造とするのか、あるいは両方共が基底構造であるということに関して議論があり、未だに決着を見ていない。(2) は、目的語である「花子を」が主語である「太郎が」を飛び越えてスクランプリングしている。(3) では、さらに埋め込み節の目的語である「花子を」が埋め込み節の外側にある主節主語を飛び越してスクランプリングされた例である。このように、埋め込み節の要素が主節に明らかにスクランプリングされたものを「長距離スクランプリング (long-distance scrambling)」と呼んでいる。

GBモデルでなされた Saito (1985) では、スクランプリングはAバー位置への付加操作だと仮定されてきたが、その後の研究 (Mahajan (1990) など) を通して、A位置への移動も存在することがわかってきた。80年代後半から90年代前半の研究により、S-スクランプリングはA移動、M-スクランプリングはA移動あるいはAバー移動、L-スクランプリングに関してはAバー移動であるということがわかってきた。

本論文が対象とするのはこの3つのうちの、L-スクランプリングである。長距離スクランプリングは、さらにその最終到着地点により、(3) が示すような、文頭に置かれるものと、次例 (4) のように主節主語の右側に置かれるものの2つに下位区分されてきた。

- (4) 太郎が その本を 花子に [PRO 読むように] 言った

本稿では、(3) のように、主節主語よりも左側 (文頭) にくるものを「LDS to pre-subject position」、(4) のように主節主語の右側にくるものを「LDS to post-subject position」と呼ぶことにする。これまでの研究から、次例 (5) が示すように、LDS to post-subject position の場合、埋め込み節が定形節 (時制節) の場合には文法性が落ちることが報告されている。

- (5) a. *太郎が その本を 次郎に [花子が 読んだと] 言った
b. ??太郎が その本を みんなに [花子が 持っている] と] 言った

(5) においては、「次郎に」は主節動詞 (「言う」) が要求するものなので、その前に「その本を」が置かれているということは、埋め込み節から主節へスクランプリングが起きていることになるが、この場合は非文と判断されることが多い。では、なぜ、(4) のような非定形節から post-subject 位置へのスクランプリングは許容されるのに対し、定形節から同位置への LDS は許されないのだろうか？ このことについてこれまで A/Aバー移動による説明がなされてきた。次節ではその説明を取り上げ、その問題点を指摘する。

3. A/Aバーによる説明とその問題点

(5) のような、定形節から主節主語後への長距離スクランプリングが許されないのに対し、(4)

のように、非定型節からの同スクランプリングは文法性が上がることは、これまで、A/Aバーの違いによって説明がなされてきた。

まず、非文である(5a)の再録である(6)から見てみよう。

- (6) *太郎が その本を 次郎に [花子が 読んだと] 言った

この文が派生される際の移動を示したのが次の(7)である²⁾。

- (7) [_{CP} 太郎が その本を_i 次郎に [_{CP} t_i^2 [花子が t_i^1 読んだ]と] 言った]

元の位置は埋め込み節の動詞「読む」の目的語である t_i^1 であるが、これはA位置である。スクランプリングがそこから埋め込み節を出る時に、CPに付加されることになるがそこはAバー位置と考えられてきた。そして最終地点である主節主語後の位置はA位置であることがわかっている。つまり、このスクランプリングはA位置からAバー位置を通してA位置に移動していることになる。これは、GB理論の時代では、移動にかかる制約(Improper Movement)に抵触したものととして排除してきた。この制約は、例えば、英語の次のようなWh移動の可否を説明する場合に用いられるものである。

- (8) a. *Who is expected that Lucy loves?
b. Who do you think that Lucy loves?

(8a)も(8b)も両方共、埋め込み節(定形節)の動詞*loves*の目的語である*who*が文頭に移動したものであるが、前者が非文と、そして後者が文法的と判断される。これらのWh移動の動きを表したものが下の(9)である。

- (9) a. Who t^3 is expected [t^2 that Lucy loves t^1]
A' A A'
b. Who do you think [t^2 that Lucy loves t^1]
A' A' A

まずは、文法的である(9b)から見ることにしよう。元位置は項の現れる位置であるので、A位置である。そこから埋め込み節を出る際に、CP付加が行われることになる。その際、Aバー位置に立ち寄っていることになる。最終到着地点である主節の文法はCP指定部でここはAバー位置である。つまりこのスクランプリングはA-A'-A'であり、異質の連鎖(chain)を形成しておらず、文法的となる。それに対して、(9a)では、 t^2 までは同様であるが、最終到着地点に達する前に、主節が受動態であるために、主節主語への移動が適用されることになる。主語位置はA位置で

ある。その後、最終地点である文頭（CP指定部）へ移動してゆく。つまり、このWh移動はA-A'-Aという異質な連鎖（chain）を構成する移動となっている。そのために、先に見たImproper movementとなり、非文と判断されるのである。

次に、非定形節ではなぜ文法的と判断されるのかについて見ておこう。ここでは説明の便宜上、非定形節をTPと仮定しておこう。従属節のTPから要素が出る場合、通過すべきCがないので、直接、最終地点にスクランブリングされると考えられる。この際の移動のChainはA-Aとなり適切な（legitimate）移動となる。Nemoto（1995）では、従属節をCPと仮定しながらも同様の説明を試みている。当時提唱されていたAGR-systemを用いて、CP指定部がA位置になるというテクニックを用いることで、Improper movementの制約を回避している。Nemotoの技術的な議論の成否に関しては置いておくとして、TP、CPいずれにせよ、Legitimateな移動になることで、定形節からのスクランブリングと異なり、均質的なchainとなることで文法性を説明できると主張する点においては共通している。

さて、この説明において重要なポイントは、(7)における最終到着地点である主節主語後の位置がA位置であるという点である。これに関してはNemoto（1993：57-8）は、束縛条件（C）、強交差現象：Strong Cross-Over（以下、SCOと略す）、束縛条件（A）の3つの証拠をあげている。それぞれについて順次見ていくことにしよう。

まずは、束縛条件(C)を用いた議論である。この条件は「(固有名などの)指示表現(R-expression)は自由である」というものであり、例えば次の(10)における「マイケル」は文全体においてそれと同一指示を持つものによってCコマンドされてはいけないという主旨である。(10b)においては、この条件は遵守されているが、(10a)では「彼」によって束縛を受けてしまっているため非文と判断される。束縛条件はA位置に関する条件であるので、「彼」の移動した主節主語位置はA位置であることになる。

- (10) a. *ジョーが 彼_iに マイケル_iのファンを 紹介するように 頼んだ。
b. ジョーが マイケル_iのファンを 彼_iに 紹介するように 頼んだ。

次はSCOを使った議論である。SCOとは「A'位置に移動したWh句と変項(Wh句の痕跡のこと)との間に、Wh句と同じ指標を持つ代名詞が現れることができない」という一般化である。(11)では、「誰のセクレタリー」というWh句がLFで文頭に移動すると考えられるが、その際に、(11a)では、Wh句が同一指示を持つ（同じ指標を持つ）束縛代名詞「そいつ」を超えてしまうことになるが故に非文となるのに対し、(11b)では「そいつ」はWh句よりも右側にあるので超えることはないが故、文法的とある。

- (11) a. *ジョーが そいつ_iに 誰_iのセクレタリーを 首にするように 命じたの？
b. ジョーが 誰_iのセクレタリーを そいつ_iに 首にするように 命じたの？

もし (11b) において「誰のセクレタリーを」がAバー位置にあるとすれば、LFで一度元位置に戻り、そこから文頭へLF移動することになるので (11a) と同様に非文になることが予測される。しかしこれは文法的な文なので、「誰のセクレタリーを」はA位置にあることになる。

3つ目は、束縛条件(A):Condition Aを用いた議論である(Nemoto 1999: 149)。照応形(anaphor)は最少の節の中で束縛されなければならないというのがこの条件の主旨であるが、(12a)においては照応形である「お互いに」がCondition (A) に違反するので、非文になっている。

- (12) a. *太郎が お互いに 花子と正夫を 批判するように 言った。
b. ? 太郎が 花子と正夫を お互いに 批判するように 言った。

それに対して、(12b) では「お互いに」は先行詞である「花子と正夫を」によって（最少領域において）束縛されているため、文法的となっている。もし「花子と正夫を」がAバー位置であるならば、radical reconstructionが起こり、結果として(12a)と同じ構造になってしまい、非文になることが予測される。しかし、これが文法的なことから、「花子と正夫を」はA位置にあることを示していることになる。

以上の3つの点から問題の位置をA位置とすることが主張されてきたわけである。これが妥当な議論である限り、本論考で問題にしている scrambling の到着地点はA位置ということになる。

さて、以上見てきたように、問題の位置をA位置とする根拠があるものの、実際の状況は実はもう少し複雑である。

まずは、言語事実としてNemoto自身やSaitoが指摘するように、時として問題の位置がAバー位置であると認定せざるを得ないデータが存在する³⁾。

- (13) 花子が お互いを [太郎と次郎]に [PRO *t* 批判すること]を 命じた
(Saito (2003: 502))

この文は文法的と判断されるが、もし問題の位置がA位置であるならば、radical reconstructionがおこらないので、Condition (C) に違反することになる。が、実際には文法的なので、LFで元位置に戻っていることになる。そうなれば、「お互いを」はA位置ではなく、Aバー位置にあることになる。

さらにはA/Aバー区分の定義の問題を指摘することもできる。このA/Aバー二分法が理論の進展とともにあいまいになってきたという点である。80年代後半に、Kuroda (1988) や Fukui and Speas (1986) などによってVP内主語仮説 (VP-internal Subject Hypothesis) が導入されたり、Larsonian VP-shellなどが提案され、一般的に認められるようになって、A/Aバーの定義が直感では捉えきれなくなってきた。当初は、D構造で項を担う位置をA位置と定義してきたわけであるが、機能範疇の整備によって、直感的には判断できなくなってしまった。つまり、これまでA/Aバーの二分法で区別してきた位置があいまいになって、確実にどちらかであると言えるのかどう

かが問題となってきたわけである。

最後に、指摘されることがほとんどなかったことではあるが、文法性の違いにも着目する必要があると考えられる。Saito (1985: 267) ではこの議論の出発点になった下の (14) に「??」の判断が付けられており、実際に Nemoto はそれほど悪くないというコメントをしている。

(14) ?? ジョンが その本を みんなに メアリーが *t* 持っていると 言った

このように判断がぶれるのに対し、先に見た英語の例 (8a) は非文法的であり、容認する母語話者はいない。つまり、日本語の例では、なんだか据りが悪い文であるという認識は共有できているものの、acceptability が人によって異なるという点は見逃してはならないのではないだろうか。もし純粋に統語論的なものによるものならば、英語のようにぶれることなく非文と判断されてもいいのに、実際にはそうっていない。これは関与するのが純粋に「統語論的」な要素でなく、判断する人の主観が入る談話的要素が入り込んでいることを示しているのではないだろうか。

4. 代案

ここで、これまでの議論を整理してみたい。主節主語の右側への長距離スクランブリングは、定形節から移動する場合と非定型節から移動する場合とは文法性が異なることが80年代後半から指摘されてきた。これについては Nemoto が90年代前半に、A/Aバー二分法を取り入れた説明 (Improper movement) を試みた。そこでは問題となる最終到着地点はA位置であると仮定されている。しかし、その一方で、Nemoto 自身が指摘するように、Aバー位置であると主張できるデータが存在することがわかっている。さらに、この二分法の定義自体が理論発展に伴ってあいまいになってきたという経緯が見られる。最後に、もし Improper movement のような統語的制約によるならば、落ち着いた文であるという点は一致しているが、その容認可能性が人によってばらつくという事実がある。このような経緯から、この節では、focus 素性に基づいた代案を提案することになる。

第1節で述べたように、日本語におけるスクランブリングが focus のような談話的要素と結びついているという見方は直感に訴えるもので、その方面からの記述・分析が行われてきた。Saito (1985) はそのような方向からではなく、統語論的な移動という観点から分析することを行った。その後、Miyagawa (1997) などによる focus-driven scrambling の研究が現れるようになった。まずは、VP内 scrambling を取り上げ (Miyagawa (1997)), それに続く一連の研究で、M-スクランブルにも focus が絡んでいるという分析が提案されてきた。さらに、Miyagawa は2000年後半からは、Chomsky (2008) の素性継承を取り入れて、Cにあった focus 素性がTへ継承されることによってEPP効果が発現し、その結果、主語、あるいは focus 素性を持つ目的語などがTP指定部へ移動するという非常に興味深い分析に昇華させた。

このように、scrambling を focus 素性と結びつける研究がひとつの流れをなすような状況になっ

てきているが、本稿もその流れに沿う論考のひとつである。実際の分析に入る前に、本稿で用いる focus に関し、いくつかの点を整理しておきたい。

まず初めに、focus 素性を持つ要素の認可には2つの方法があると仮定する。音調による方法と語順によるものである。前者の場合は、focus 素性を持つ要素は移動せずに (in-situ で) ピッチを置いて発音されることによって焦点を具体化させる方法で、これについては統語論の領域外ということで本稿では扱わない。後者の場合は、統語論との結びつきが強いもので、元位置から移動することによって focus 素性が認可されると仮定するものである。つまり、語順の変化によって focus が具体化されるという方法である。

次に、focus 素性は認可されるとそれ以上移動することはできないと仮定する。それ以上の移動が可能であるならば、それは focus 素性以外の素性をも含んだものであると分析する。

このような前提のもと、問題になっている現象がどのように説明できるかについて考えることにしよう。

問題の現象を扱う上でヒントになるのが、次のような英語のデータである。

- (15) a. * I expect to Mary [_{TP} John to give this book]
- b. * I expect on this wall [_{TP} PRO to have hung a portrait of our founder]
- (16) a. Peter doesn't believe that Mary, John likes.
- b. * Peter doesn't believe ϕ Mary, John likes. (Bošković 1997: 30)

(15) は、いわゆる例外的格付構文 (ECM 構文) と呼ばれる構文で、これらは次の (17) の下線部を話題化 (Topicalization) したものであるが、ともに非文と判断される。

- (17) a. I expect John to give this book [to Mary].
- b. I expect a portrait of our founder to have hung [on this wall].

ECM 構文は COMP がいないことで知られている。また (16) は従属節内における Topicalization の例であるが、COMP の *that* が現れて初めて Topicize が可能になることを示している。つまり両者とも Topicalization には COMP が不可欠であることを示している。では、なぜ、COMP の有無が PP 前置や Topicalization に関与しているのだろうか。それは Rizzi らが推し進めてきた Cartography の研究、つまり COMP の階層性を仮定すれば説明が可能となる。90年代半ばより始まった Cartography の研究により Rizzi はそれまで単一の機能範疇であると考えられていた COMP が、談話的要素もかかわる複数の機能範疇からなるものであることを明らかにした。次が現在までのところわかってきている C の階層性である。

- (18) Rizzi C の階層性：

[_{Force P} Force [_{Top P} Topic [_{Foc P} Focus [_{Fin P} Finite [_{TP} T]]]]]

TopicやFocusといったものはTPよりも上位に存在するために、Cがない埋め込み節（ECM構文など）の場合はそれらが存在しないことになる。つまり、TopicやFocusが関与する現象はそこでは現れないことになる。そのために先の(15)や(16)のような移動は認められないことになる。

とりあえず、今、この考え方をそのまま我々が扱う問題の非定形節に適用することにしよう。派生を考える文は次の(19)である。

(19) 太郎が その本を 花子に 読むように 言った

まず、この文は(20)に示すように従属節が形成されることから始める。ここで、その目的語である「その本を」が[+focus]を持ってもものと仮定する。

(20) [_{TP} PRO その本を 読むように]
[+focus]

今、先の英語のECM構文と同様に、(20)の節はTPであるという仮定を採用するならば、この節の中には、Cが欠如しているので、focus素性を照合するFocus-headも存在しないことになる。よって、この(20)の段階では「その本を」の[+focus]は認可できないことになり、次の段階に先送りされることになる。次に、主節が形成される時に、主節のいわゆるmiddle fieldにfocus素性を照合できる位置が現れることになる⁴⁾。

(21) [_{VP} その本を 花子に [_{TP} PRO *t* 読むように] 言う]
[+focus]

主節に移動した「その本を」はこの位置(middle field)で認可を受けることになる。

以上が、非定形節からのscramblingを、focus素性を用いて説明したものある。他方、定形節からの取り出しはどうなるのかを考えてみよう。((7)を(22)として再録。)

(22) *太郎が その本を 次郎に [花子が 読んだと] 言った

(22)における従属節はCPであるというのが一般的見解である。よって、「その本を」が最終地点(主節主語の右側)に達するまでに、まず従属節のCに辿り着かなければならない。それが次の例である⁵⁾。

(23) [_{CP} その本を [花子が 読んだ] と]
[+focus]

先の非定形節とは異なり、Cが存在するということは談話機能的主要部が存在することになる。具体的にはFocus Headが存在するので、この時点で「その本を」が持つfocus素性はこのC領域にあるFocusによって照合されることになる。ここで、focus素性が照合されたわけなので、この段階でfocus素性はなくなっていると考えられる。つまり、ここよりも上位にある、問題の主節主語位置へのscramblingには動機づけがないことになる。そのため、無理にそれを行った(22)は非文になるわけである。

しかしながら、ここで注意すべき点がいくつかある。まずは、次のような例文の存在である。

(24) 太郎が 花子に [TP 彼女の両親が お金を 支払うように] 命じた

この種の構文はHasegawa(1984/1985)に容認が低いと指摘されたものであるが、Sakaguchi(1990)では容認可能性が極めて高いものが紹介されている。これは「ように」が用いられていることからわかるように、非定形節であるが、先の(19)と異なるのは、従属節に語彙的主語が現れているという点である。この種の構文の容認可能性は主語の選択によって変わるようではあるが、(24)のような文ではかなりの人が容認可能であると判断する⁶⁾。この構文では、語彙的主語のないYOONI節とは異なり主節主語後へのscramblingができない。

(25) *太郎が お金を 花子に [TP 彼女の両親が t 支払うように] 命じた

もし、上で見たように非定形節がTPであるとすれば、(26)の段階では、focus素性は消えていないはずである。

(26) お金を [TP 彼女の両親が t 支払うように]
[+ focus]

よって、照合されないfocus素性は照合を受けるために、主節のmiddle fieldまで移動することができるはずであり、そのscramblingは文法的であることが予想されるが、実際に(25)が示すように、非文と判断される。

さらに次のような例も問題となる。

(27) 太郎が その本を みんなに[CP [pro t 読んだ]と] 言った

Nemoto(1995:265)では、その脚注においてこの文を完全に文法的であるとしている。先に見た定形節からのscramblingでは、従属節のC領域においてfocus素性が照合されるために、それ以上の(主節主語位置への)移動は認可されないという説明にも関わらず、(27)が文法的と判断されるのはなぜかという問題が生じる。

このような問題が残るのは捉えようとした一般化に不備があるためだと考えられる。つまり、これまでは、Control構文からの主節主語後への scrambling は許されるのに対し、定形節からのそれは許されないという一般化に対して、A/A バー区分を用いた説明がなされてきた。しかし、上で見た例外の存在は、この一般化が正しくないことを示している。これらの例外をこれまでのコアデータのスキーマに付け加えて比較したものが下の表である。

(28) コアデータ

- a *Subj NP_i PP [[[Subj t_i V]T] C] V
b Subj NP_i PP [[PRO t_i V]YOONI] V

新しいデータ

- c Subj NP_i PP [[[PRO t_i V]T] C] V
d *Subj NP_i PP [[Subj t_i V]YOONI] V

ここから導き出せる一般化は、従属節における定形・非定形の対立ではなく、従属節に語彙的な主語が存在するかしないかに集約することができる。さらに、ここでは、YOONI節を Uchibori (2000) に従って、補文標識 (COMP) であるという仮定を採用する。そうすると (28) は次のようなスキーマに還元することができる。

- (29) *Subj NP_i PP [_{CP} [Subj t_i V] C] V
Subj NP_i PP [_{CP} [[PRO t_i V] C] V

focus 素性照合のための scrambling の下で、(29) の新しい一般化がどう説明されるのかについて考えてみよう。まずは、語彙的な主語を持つ非定形節からの scrambling である。(25) を (30) として再録する。これは定形節からの主節主語後への scrambling が認可されない場合と同じように説明できる。

- (30) *太郎が お金を 花子に [_{CP} 彼女の両親が t 支払うように] 命じた

つまり、「お金を」の focus 素性は C に移動した段階で照合される。

- (31) [_{CP} お金を [彼女の両親が t 支払うように]]
[+ focus]

この段階で、従属節に存在する C の Focus head が「お金を」の持つ focus 素性を認可するので、素性は消えてしまう。よって、それ以上は移動できない。これは単純に説明することができた。

次に、単純に説明できた (19) ((32) として再録) のような典型的なコントロール構文から、

問題の scrambling がなぜ許されるかについて考えよう。

(32) 太郎が その本を 花子に [_{CP}[PRO *t* 読む]ように] 言った (= (19))

ここでも、まず、「その本を」が scrambling によって従属節の C のところに移動する。

(33) [_{CP} その本を [PRO *t* 読む]ように]
[+ focus]

(31) と同じように、「その本を」の focus 素性がこの段階で従属節の C によって認可されるのならば、それ以上の移動は本来は認められるべきでない。にもかかわらず、(32) が示すように、文法的な移動になっている。それはなぜであろうか。

ここで見落としてはならないのは、C へ移動する前の基底の構造である。

(34) [_{CP} [PRO その本を 読む]ように]

この (34) と先の (33) とを比較してみると、音声的に具現化されない主語を持つ (34) は (33) と区別することができないということに注意しなければならない。つまり、(33) のように移動してもそれは string-vacuous なもので語順の変化をもたらす scrambling ではないのである。つまり scrambling としてカウントすることはできないということになる。これは Hoji (1985 : 352) が提案した scrambling に対する制約を想起させるものである。

(35) Ban on String-Vacuous Scrambling

「語順に変化がない場合、Scrambling の操作を行ってはならない」

(A syntactic adjunction operation cannot apply if it does not change the order of the lexical string.)

この Hoji の制約に従えば、(33) の段階に進んだとしてもその scrambling は無効となる。つまり、「その本を」の持っている focus 素性が認可されないまま残ると解釈することもできる。つまり、この時点では問題の focus 素性の照合は行われないのである。そうなれば、次の主節の *vP*/VP あたりの Middle field に存在すると考えられる位置においてその focus 素性が認可されることになるので、そこまで移動することができることになる。

この説明は、音声的に具現化されない主語を持つ定形節からの scrambling が許される場合も同じである。

(36) 太郎が その本を みんなに [_{CP} [*pro* *t* 読んだ]と] 言った。 (= (27))

この場合も、次に示すように、元の語順である (37a) と、従属節の C まで移動した場合の語順 (37b) は同一のものである。

- (37) a. [_{CP} [pro その本を 読んだ] と]
 b. [_{CP} その本を [pro *t* 読んだ] と]

それゆえに、(37b) で「その本を」の持つ focus 素性は照合されず、さらなる移動が許され、最終的に (36) の文が成立することになる。

このように、Hoji の制約を取り入れると、(29) の新しい一般化を説明することができるのであるが、次のようなデータが問題になるように思えるかもしれない。それは音声的具現化のない主語を持つ従属節において何らかの形で語順の変化が起きる場合である。例えば付加詞が節内に存在する次のようなケースである。

- (38) 太郎が その本を 花子に [_{CP} [PRO 図書館で *t* 読む] ように] 言った

この場合の元の語順は (39a) であり、C に移動した語順は (39b) である。

- (39) a. [_{CP} [PRO 図書館で その本を 読む] ように]
 b. [_{CP} その本を [PRO 図書館で *t* 読む] ように]

両者の語順は明らかに異なっている。ということは従属節の C から移動した (38) は非文と予測されるのにもかかわらず、文法的な文となっている。

この問題は、Ishii (2001) が観察した scrambling の特性によって解ける可能性がある。次の VP 内の scrambling を観察してみよう。

- (40) a. 太郎は・が パリで 時計を 買った
 b. 太郎は・が 時計を パリで 買った
 c. 太郎は・が **時計を** パリで 買った

(40a) が通常、基本的語順 (basic/unmarked permutation) であるとされているが、この場合には、目的語である「時計を」に focus があると母語話者はみなす傾向が極めて強い。(40b) のように目的語を場所の付加詞である「パリで」の前に scrambling させた場合は、何らかの prosodic な方法を用いない限り、動詞の直前に来る「パリで」に focus が置かれるというのが母語話者の直感である。もし scrambling した要素 (「時計を」) に focus を当てようとする場合には、(40c) のように、prosodic な方法で、ピッチを置かなければいけない。つまり、この prosodic な方法を使わない限り、この scrambling (「時計を」が付加詞の左側に置かれる操作) は、目的語の「時計を」

の focus 素性を認可するために起きるのではなく、付加詞の「パリで」に focus を与えるために、「時計を」が自己犠牲的に移動するものであることになる。Ishii はこのような scrambling を「他利的な (altruistic) スクランブリング」と呼んだ。

この他利的な特質が scrambling に備わっていると考えて、先の (39b) を眺めることにしよう。
(41) として再録。)

(41) [CP その本を [PRO 図書館で t 読む] ように]

この場合は、(prosodic な方法を用いないという前提で)「その本を」の持っている focus 素性はここでは照合されないままになる。そのために、(38) ((42) として再録) さらに上の位置 (主節の middle field) に移動し、そこで focus が照合されることになる。

(42) 太郎が その本を 花子に [CP [PRO 図書館で t 読む] ように] 言った

このように、Ishii (2001) の「他利的なスクランブリング」を考慮すれば、問題となった scrambling も説明できることがわかる。

5. Conclusion

本稿では、長年の懸案であった主節主語後への長距離 scrambling について、focus の認可という観点から説明を試みたものである。その際に、従来の一般化では捉えきれない例をあげ、真の一般化は、従属節に語彙的主語が存在するかしないかによって問題の scrambling が許されるのかどうかが決まることを指摘した。Uchibori (2000) が分析したように YOONI 節を CP と分析することで、その C には Focus-head があり、そこで、scrambling を受ける要素の focus 素性 ([+focus]) が照合されることを論じた。しかし、その節の主語が音声的に具現化されていないものであるならば、Hoji (1985) の制約によって語順が変化しないために、その位置での照合は無効であり、さらに上位に移動してその位置 (主節主語の右側) で認可されることになることを論じた。また、付加詞が YOONI 節に現れる場合には、語順に変化が見られるものの Ishii (2001) の言う「他利的な」移動とみなされるために、そこでは focus 素性が認可されず、上位の位置へと移動できることを論じた⁷⁾。

最後に、本稿では取り扱わなかった 2 つの点について簡単に触れておきたい。まず、束縛関係の事実である。第 3 節で触れたように、主節主語後の位置は A 位置でもあり A バー位置でもある。A/A バーの区別を用いない本稿のような分析では (43) のような例は問題にならないのかという疑問が起きるかもしれない。

- (43) 太郎が お互いを 次郎と花子に 批判するように 命じた。
cf. 太郎が 次郎と花子を お互いに 批判するように 命じた。

このような束縛関係については、本稿では基本的に Saito (2004) の提案する派生的解釈で説明できるのではないかと考えている⁸⁾。

2点目は、主節主語前（文頭）への scrambling がなぜ可能かという問題である。それぞれ適切な位置において focus 素性が照合されるのであれば、なぜ、それより上位にある文頭への移動は許されるかという点である。これについては、Rizzi (2001, 2004) の Relativized Minimality 修正版 (the feature-based Relativised Minimality) を仮定することで問題を回避できると考えている。つまり、文頭には単に focus 素性にさらにそこ特有の機能があると考ええる。それを仮に X 素性と呼ぶことにすると、X 素性は文頭で初めて認可されるものなので、そこまでの移動が可能となることになる。

* この春（2012年3月）定年退職を迎えられました新熊清前学部長へ、長年にわたる感謝の印として、拙稿を捧げます。1989年春、外国語学部開設時に、先生に本学への赴任でお世話になって以来、大学で教鞭を執る者のアイデンティティ（研究）を忘れないようにと、常に小生を励まし続けてくださいました。公私にわたり大変お世話になったことに対し心よりお礼申し上げます。

注

- 1) Short-, Middle-, Long-scrambling の用語は Tada (1993) による。
- 2) ここでは原理とパラメータ理論 (PP) 時の痕跡 (trace: *t*) を用いた表示を使って説明するが、これはあくまでも便宜上である。痕跡は Minimalist の時代に入ってから否定されているが、本論の議論には直接関与しないので説明の簡略化のために用いることにする。
- 3) Nemoto (1993: 156) も参照のこと。
- 4) 本稿では *v*P/VP 周辺に Focus を認可する認可子が存在するという仮定を採用。この仮定の妥当性については、Belletti (2001, 2004), Jayaseelan (2001), Maeda (2010) 等を参照のこと。
- 5) ここでは Miyagawa 流の C から T への Focus 素性継承は仮定しない。
- 6) 筆者の小規模な聞きとりでは全員が (24) を容認し、ほとんどが (25) を極めて容認度が低い、あるいは非文と判断した。
- 7) 従属節の語彙的主語よりも左に置かれる場合も「利他的」になるのではないかという点についてはさらに詰める必要がある。今後の課題としておきたい。
- 8) このことは Akaso (2012) で扱っている。

参考文献

- Akaso, Naoyuki (2012) "Criterial Freezing and Long-Distance Scrambling to Post-Subject Position" Poster session in Formal Approaches to Japanese Linguistics 6, at Berlin, Germany.
- Belletti, Adriana (2001) "'Inversion' as Focalization," *Subject Inversion in Romance and the Theory of Universal Grammar*. Aafke C. J. Hulk and Jean-Yves Pollock (eds.), pp. 60–90, Oxford University Press, Oxford.
- Belletti, Adriana (2004) "Aspects of the Low IP Area," *The Structure of IP and CP: The Cartography of Syntactic Structures* Vol. 2. Luigi Rizzi (ed), pp. 16–51, Oxford University Press, Oxford.
- Bošković Željko (1997) *The Syntax of Nonfinite Complementation*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Boeckx Cedric (2003) "Free Word Order in Minimalist Syntax," *Folia Linguistica*, 37. 77–102.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2008) "On Phases," *Foundamental Issues in Linguistic Theory: Essays in Honor of Jean-Roger Vergnaud*. Robert Frieden, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta (eds.), pp. 133–166, MIT Press, Cambridge, MA.
- Cinque, Guglielmo (1999) *Adverbs and Functional Heads: A Cross-Linguistic Perspective*. Oxford University Press, New York.
- Fukui N. and Speas M. (1986) "Specifiers and Projection," *MIT Working Papers in Linguistics*, 8. 128–72.
- Hasegawa, Nobuko (1984/85) "On the so-called of 'Empty Pronouns' in Japanese," *The Linguistic Review*, Vol. 4, No. 3, 289–341.
- Ishii, Yasuo (2001) "Presuppositional Effects of Scrambling Reconsidered" in the proceedings of the COE International Symposium, Kanda University of International Studies.
- Jayaseelan, Karattuparambil A. (2001) "IP-Internal Topic and Focus Phrases," *Studia Linguistica*, 55. 39–75.
- Kuroda, Shige-Yuki (1988) "Whether we agree or not: a comparative syntax of English and Japanese," *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*. W. J. Poser (ed.), pp. 103–43. Stanford: CSLI.
- Maeda, Masako (2010) "The Criterial Freezing Effect and Split A'-Movement," *English Linguistics*, 27. 1013–1055.
- Mahajan, Anoop (1990) *The A/A-bar Distinction and Movement Theory*. Doctoral dissertation, MIT.
- Miyagawa Shigeru (1997) "Against Optional Scrambling," *Linguistic Inquiry*, 28. 1–25.
- Miyagawa Shigeru (2010) *Why Agree? Why Move? Unifying Agreement-based and Discourse Configurational Languages*, MIT Press, Cambridge, MA.
- Nemoto Naoko (1993) *Chains and Case Positions: A Study from Scrambling in Japanese*, Doctoral dissertation, University of Connecticut.
- Nemoto Naoko (1995) "Scrambling in Japanese, AGRoP, and economy of derivation," *Lingua*, 97. 257–73.
- Rizzi Luigi (1997) "The Fine Structure of the Left Periphery," *Elements of Grammar: Handbook in Generative Syntax*. Liliane Haegeman (ed.), pp. 281–337, Kluwer, Dordrecht.
- Rizzi Luigi (2001) "Relativized Minimality Effects," *The Handbook of Contemporary Syntactic Theory*. M. Baltin and C. Collins (eds.), pp. 145–176. Oxford: Blackwell.
- Rizzi Luigi (2004) "Locality and left periphery," *Structures and Beyond*. A. Belletti (ed.), pp. 104–131. Oxford: Oxford University Press.
- Saito, Mamoru. (1985) *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications*. Doctoral dissertation, MIT.
- Saito, Mamoru. (1989) "Scrambling as semantically vacuous A'-movement," *Alternative Conceptions of Phrase Structure*. M. R. Baltin and A. S. Kroch (eds.), pp. 182–200. Chicago: University of Chicago Press.

- Saito, Mamoru. (1992) Long-distance Scrambling in Japanese. *Journal of East Asian Linguistics*, 1. 69–118.
- Saito Mamoru (2003) “A Derivational Approach to the Interpretation of Scrambling Chains,” *Lingua*, 113. 481–518.
- Saito, Mamoru. 2005. “Further Notes on the Interpretation of Scrambling Chains.” *The Free Word Order Phenomenon: Its Syntactic Sources and Diversity*. J. Sabel and M. Saito (eds.), pp. 335–376. Mouton deGruyter, Berlin.
- Sakaguchi, Mari (1990) “Control Structures in Japanese,” *Japanese/Korean Linguistics*. pp. 303–317.
- Tada, Hiroaki. 1993. *A/A-Bar Partition in Derivation*. Doctoral dissertation, MIT.
- Uchibori, Asako (2000) *The Syntax of Subjunctive Complement: Evidence from Japanese*. Doctoral dissertation, University of Connecticut.